

南都法華寺

土犬之圖

見も志ら奴人にも

なるる

犬乃子に

那とか

ほとけの

心なからん

村上繁雄

犬狗養畜傳 全



大にたは生る物を殺し、いため鬪かはしめて遊び楽まん人は、畜生残害乃類之。萬鳥獸ちいさき虫までも心をとめてありさまを見流に、子を思ひ親をなつかしくし、夫婦をともし、孫らをいのり、嘆いおほく身を愛し。命をおしめる事、ひとへに愚痴那る故に、人よりも満さりて甚し。彼にくるしむことをなして、命をうばわん事、いかでかいた満しからざん。すべて一切乃有情をえて、慈悲乃心なからんは人倫に阿らずといふ。是は徒然艸にあらはすところの文なるを。餘昏阿るに任せてここに出し、此書乃大意を表すること志かり。

凡^テ犬^ニ以^テ三^月而^レ生^ス在^ハ蓄^シ屬^ニ木^ニ
 在^ハ卦^ニ屬^シ良^ニ在^ハ禽^ニ應^ス婁^ニ星^ニ
 生^{スル}一^子豪^ト又^ト曰^ク獬^ニ二^子曰^ク獅^ト
 三^子曰^ク豸^ト

主志らぬ岡部の里を

来て登へは

古たへぬさき尔

犬ぞ登かむ類

京極



犬狗養畜傳

浪華 曉鐘成著述

周禮六畜註、獸可畜者六、豕、牛、馬、羊、犬、豕、雞と有り。論語乃古註にも犬は守禦ぐを以て人に養ると云里。又風俗通曰、俗説に狗は賓主を別て善守胸せぐ故に、四門に着て盜賊を避と也。讀高層伝には犬を防畜と云ひ、楞嚴釋要鈔には狗を名て守狗と云里。されば兼好が徒然草にも犬は守里防ぐつとめ。人にも勝里たれば必ずあるべしと云り。實や犬は能恩を知里仇を酬ひ。鼻利くして能氣を齷ぎ、能家を守て非常の人を内に入ず、嚴く吠て竊盜を防ぐ。官家賤民ともに畜ずんば有べからざる乃者なり。且田犬は狩獵の時まづ山野に放ち入て禽獸の所在を齷しむ。乃官家の宝獸なり。原来一切の邪魅妖術をよく禳辟るが由ゑに、道家に是を禁ずるといへ里。凡そ犬乃忠功人に勝れし。其養へる主乃恩を知里。是を報ずること往古より和漢ともにその例少からず。〔史に載こと多しといへども事志げ、れば略之〕

故に世人狗を養ふに。慈愛阿らずんば人道に阿らず。夫生るを愛し死を悼むは仁乃道なり。則ちこれを慈悲と云。そも慈悲乃心なきは人倫に阿らず。法界次第云能他に樂を與る乃心、これを名て慈とす。能他の苦を拔乃心、これを名て悲とす。又益經通今記曰、衆生を愍覆して苦を拔、樂を

与を慈悲と名づく和阿り。大論に曰、胎卵湿化は生生乃父母、魚鳥禽獸は世世乃兄弟と。斯有ば此世に生を受るも乃、禽獸に至るまで皆兄弟なり。憐まずんば阿るべからず。況や家に羆て朝夕狎て隨者に於てをや。予平生に生るを愛し死を悼むが由恵に。こゝに犬狗を養の心得を著し、彼を助くる乃便とす。衆人閱して用ひたまふこと阿らば少子がよろこび是に過ずといふ。

○馬錢んの毒に中るときは急に冷水を呑しむべし、其毒を解す。

○狗癩病を發するときには桃乃木乃葉を搗潤し、其皮毛に擦つけ少時して

是を阿らひ去るべし。かく乃古とく度すれば終には治する之。

○癬疥を生ずるときは好茶を煎じ、一夜冷して後是を阿たふべし。

○創を受る時は急に小豆をにて食しむべし。若粒を嫌いて食ざれば、能

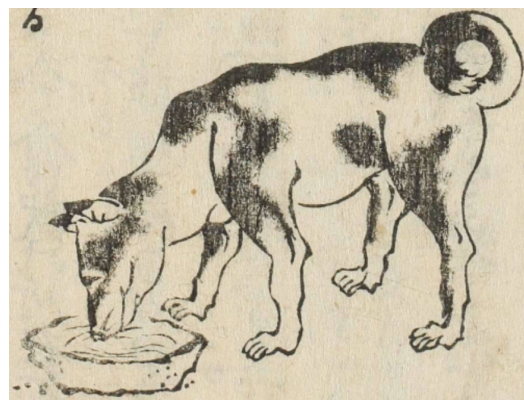
煮たる汁ばかりを飲すべし。尤よく冷して飲すべし。惣じて阿つきも

のは阿しく、冷物をよしとす。且灼傷打瘍等も小豆を用ひてよし。

小疵は自ら舐て愈といへども、舐ことあらざる所は愈ずらし。何

れにもあれ創を受なば小豆を煮てはやく痛苦を救ふべし。小豆を嫌ふこと阿らば、鯉節をかき

入て食しむべし。



○壁蝨皮だにかはに入いりて血ちを吸すふこと常つねにあり。多くは由よびの股またにくひつく故ゆへに必かならずあしをかぐむることあり。其歩そのあゆむに趁ちんば跛あのごとく歩ある風阿あしきものは、指ゆびの股またを穿せんざく鑿くして是これを取りて助たすくべし。然しかれども打うち擲ころれ趁ちんばを引ひくもあれば猶なほよく考かんがふべし。且かつ耳みみの中うちなどにも喰くつきおれば、時とき々く見みて遣つかすべし。その余ほか蚤蝨みしらみもとるべし。

○狗蠅いぬばいは多く老おほたる狗いぬには着つくものにして、凡おほそ頸くびのほとりに群むらがり、毛け乃な中なかを潜くりて血ちを嘔すふも乃なり。煙草たばこ乃やに脂きを禁よふ故ゆへに何いづれも煙草たばこのぢくを編あみて頸環くびだまに作り掛かる阿あ里り。この趣向しゆかうもつともよし。狗蠅いぬばいは冬ふゆにいたれば狗いぬの耳みみの中うちに蔭かくる、といへ里しか。然しかれば冬ふゆ乃うち中なかに耳みみの中なかをさぐりて殺ころし置おきなば夏なつにいたりて乃うれ憂あるひ有あまじく覚おぼ由また。又また燈ともし油物身あぶらそうみの皮毛かはけにぬり付つくれば、忽たちち蠅はいさり死しぬると云いへり。

○蚤虱のみしらみを取とるには樟腦しょうなうを犬いぬ乃物身そうみにぬり付つけをき、桶箱をけはこの類たぐいを以もつて犬いぬを覆おひ蓋ふたして、少時しばしありてはなち出いせば其蚤虱そのみしらみ悉おちく落おてすみやかに去さなり。

○川蝦海蝦かわえびうみえびともに喰くすべからず。蝦えびるいを食しよくすれば脚あしかぐみ弱よほくなりて、腰拔こしぬけ乃のごとく成なるなり。かたく禁いむべし。若阿もしやまつて蝦えびを喰くひ此毒このどくに阿あたらば、黒豆くろまめの煮汁にしるを冷ひや多く飲のみすべし。又また鯡にしんを喰くすもよし。



○咽喉のんどに魚うをの骨ほねなどをたててくるしむことあらば、飯めしのかたまりを喰くはすべし。

○惣そうじて辛からき物ものには熱物ねつぶつ多おほし。必かならずず与あふべからず。又また酒さけかすなど宜よろしからず。

○常つねに臥所ふすところには蕙むしろ、稗薦わらごも、明俵あきだわらのたぐ乃類なひを敷しきて寐ねさすべし。犬いぬは至いたて濕氣しつぎを悪きらふも乃ななれば、心こころを付つけて得えさすべし。止事やむことを得えずして常つねに濕氣しつぎの地ちに眠ねむる時ときは必かならず病やまひを生しやうずることあり。

○夜中やちゆうに門外もんぐわいへ出いでんと頻しきりに吠ほゆることあり。是これは小便せうべん又または糞ふんをせんと告つぐる之これ。納家なや或あるひはうら口ぐちに出いだして小便せうべんをさすべし。尤もつともせうべんならば裏口うらぐちにてすれども糞ふんは決けつして畜かはれし家いへ乃四壁しへきの隙あいだにする

ことを慎つしむ由よしへ、少すこし離はなれし所ところならでは糞ふんはせざるもと心會こころあべし。さればとて夜中やちゆうに外面そともに出いだすことは宜よろしからず。納家なやなどに連由つれくべし。

○狗いぬは腹中常ふくちゆうつねに熱ねつするもの由よしへ、暑あつさに至いたれば舌したを出いだし喘あへぎ苦くるしめり。然しかれども是これは病やまひに阿あらず。暑あつさに苦くるむれば、鉢はちなどに冷ひえたる水を湛たて置おきて飲のみしむべし。尤もつともしいじ四時よじともに水みづを絶たさず鉢はちにたたへ置おべし。魚類ぎよるいを食しょくせし後あとにては冬ふゆにても水みづを飲のみも乃な之の。必かならず喉のどをかはかしむることなかれ。予平生われつねに冷水れいすいを湛たへ近隣きんりんに粮やしなへる多おほく乃犬いぬに与あたふるに、其その快こころよく飲のみる形勢ありさまはさもこそと想像おもひやる。人畜にんちくなんぞ苦楽くらくの隔へだてあらんや、我われよしとおもふ事は人ひともさもあらんと施ほじし、あしき事は人ひとも否いやにならんと思おもひて、なせざるを恕じよといふとぞ。故ゆへに恕じよを能よくおこなは行なばやがて仁じんに至いたるといへ里。

○秋より末に至り雨日などには、能狎たるいぬは席上に上らんと為ることあり。是狗は濕氣を嫌うが由へに、床乃上に居んとするなれば此時は濕氣なき蕙を地に敷て与ふ。されば其上に臥なり。必らず怪みて禁むる事なかれ。

○平生乃食用に強き飯ばかりを多く喰しむべからず。彼が性余れる物を探し求て喰ふも乃故、飽まで生飯を喰むれば、病を發すること阿り。希うは粥の冷たるをよしとす。或は飯櫃乃洗ひ水又は新米の糠を水にて練て与ふるもよし。豆腐乃から、蕎麦、小豆粥などもよし。尤是等ばかり喰に美味あらざれば嫌ことも阿るべし。飯粥などを与るに一度は飯、一度は糠など、取りまぜて食すべし。彼が身の為に頗るよし。尚盛長乃後は阿まり加減にも及ざれども、生れて暫時の間食のかけ引きに心を付すべし。子狗の愛らしきに溺れて生飯ばかりを強て喰せば、上腹はり出て終には病を發することあり。尔在ばとて餓に及ばずば甚だ阿しく、只程よく食を与べし。子狗は則ち人間の小児と心得べし。其養ひかた阿しくして狂犬病犬と成る、人を咬が由へに、遠き山野に捨ること不便ならずや。そもや人間と畜類と皆別々乃物と思ふが由へに心を用ざる之。行基



菩薩ぼさつの哥うたにへ山鳥やまどり乃なり ほろくと啼なく 聲こえきけば 父ちちかとぞ思おもふ 母ははかとぞ思おもふ。これ往古いにしへ六道ろくどう衆生しゅじやう皆みな是我わが父母ふぼといへる經文きやうもんにて詠よめり。夫それろくどう六道ろくどうを廻めぐる衆生しゅじやう、親おやとなり子ことなり、幾いくせん千萬まん度どといふ事かぎ限りなし。されば人畜にんちく乃なり隔有へだてべからず。偏ひとへに慈悲じひをたれなんこそ願ねがいし。

○人過ひとあやまつて彼かれが尾をを踏ふみ、又は罪つみなきに打うたんとして却かへつて咬かまれ、創きづを蒙かうむるは人の阿ひとしきにして、犬いぬの科とがにあらず。是これを咬かみ犬病いぬやまいぬなどと罵ののしるは非ひ之なり。譬たとへの科とがありとも強つよく打擲うちちやくすべきにあらず。人は萬物ばんぶつ乃なり長ちやうたり、上うへたる者下ものしもを憐あはれむは人倫じんりん乃なり道みち之なり。若もし罪つみあらば枝つへを揚あけて打形うつつまをすべし。何なんぞ嚴きびしく打擲うちちやくして幾許いくばくの益えきがあらん。所謂いはゆる無益むえき殺生せつしやうなり。

○自愛みずからあいする狗いぬを奨けしかけ他ひとのいぬと闘たたかはたのし樂たのしめる事せつしやう殺生せつしやうの至いたり之なり。他ひと乃いぬ犬うちに打勝うちかって傷きずを付何つけなんの益えき阿えきり耶や。自犬創わがいぬきずをかうむらば眼前がんぜんに痛いたしからず耶や。其上そのうへたたかは事こと數度すどに及およばいぬの氣盛きさかんになりて、後のちには人ひとをも咬かむことあり。必かならず闘たたかはすことをすべからず。彼かれは畜生ちくせう殘害ざんがいとて互たがいに咬合かみあい争あらそふ性せいあり。是これををさへて殘害ざんがいせざる様やうはからふこそ人ひとの道みち之なり。志しかる耳是にこれをあらそはせ樂たのしみとなすは、其畜生そのちくしやうにも劣おとるべし。且かつ此闘このたたかかひよりして双方さうほうの人喧嘩ひとけん口論くわろんに及およぶことあり。甚はなはだ浅様あさましき事ことども之なり。往昔いにしへ相模さがみ入道にうどう崇鑿さうかん狗いぬを闘たたかわず事ことを好このみしが、果はたして兵乱へうらんの前表ぜんへうたりしといふことあり。決けつして宜よろしからざる事こと之なり。尤もつともわらんべこもの童小者たぐ乃なり類なんひ何なん乃なん辯わきまへもなくならずこと多おほし。是これは

其親々其主人より教訓を加え禁しむべきこと之。其子乃所業阿しきは親々乃教なき由へ之。其召使ひ乃所作阿しきは其主人の教訓なきが由へなるべし。全く主親々乃恥といふべし。若両犬のたたかふこと阿らば、必らず鎮め分るこそ慈悲と云べし。

○梵網戒疏發隱曰、慈悲とは諸の衆生を觀て赤子を保んずるがごとく、傷みて忍ばざるなりとぞ。又慈鎮の哥にへこれも皆 わが身をつみて 思ふべし 命はおしきも乃と知らずや。唯々畜生をあらそわせて、我身乃楽みとなす事をすべからざるも乃なり。

○凡犬乃病を得を瘦犬、犬風、狂犬、獠犬、癩犬などと号す。すべて時候乃不正に中るあり。食物よく發るあり。何れも發病の兆しなれば、忽ち其形状常にかはること阿り。若如此相阿らば病重からざる間にいそぎ薬を飲しむべし。則ち其薬方を茲に委しく著さんと欲ども、世の人業用繁くして製法なすことを倦み、予が意に順ひたまふ事有まじく覺るにより、今般そ乃良薬乃法を伝へ、滄海堂の老店にて是を世に弘くなさしめんとす。犬狗を憐みたまふ人ならば、需めて用たまわんことを希ふ。犬の病を助くるにおいては、人咬るる乃難もなく、彼を助け是を保んずる乃理ならんか。尚病犬の形状の事は其良薬の能書に詳かに識すを以てこゝにもらせ里。

○犬は夜中安く眠ることをせざれば、夜の明るを待かね、外面に出んとて主をせがめども、必ず未明より外面に出すことなかれ。近年狗賊多く徘徊して所々に於て撃取こと夥し。然ば日東に昇り、往來の行人繁なるを待て出すべし。既に予が愛する所の白犬も、過し秋狗賊乃為に害せられ命を果せり。故に尚此事を衆人に告て其撲変なからん事を願ふ。

○都而主なき狗は終夜路頭に臥由へ、夜氣に阿たり風寒に冒され、時候乃外邪に感じ病を發ること多し。其上狗賊乃為に悉く害せらるれば、若近遍に主なくして臥所を定めぬ狗あらば、必ず慈悲を加へよ。夜は晩刻より内に入りて臥しめ朝は心を付て遅く出し、賊難を救ひ助け玉はん事を希ふ。

○夫朝暮に神を信て幸福を祈里佛を念じて後世を願とも、慈悲乃心なくして何ぞ神佛の意に叶ふべき耶。只偏に上を敬ひ、掟を守る、下を憐み、慈悲を施さば、自ら神意佛意に叶ひて、祈らずとても冥助阿るべし。

瘦狗良方

犬乃病を治す薬

犬の性は能恩を知里、仇を報ひ、能家を守て鼻を利くして能氣を嗅ぎ、能家を守て非常の人を内に入ず、厳く吠て竊盜を防ぎ、一切の邪魅妖術を禳辟乃良獸にして、往古より犬の忠功人に勝る事と漢ともにその例少なからず。故に世人是を養ふに。慈愛阿らずんば有べからず、然ば養人多く彼ら壯健乃時は愛すといへども既に病を發するに至りて、治療加由る乃事聞ず。夫生るを愛し死を悼むは仁の道之。又他に樂を與ふるを慈といひ、他の苦を救ふを悲といふ。尤人として此慈悲の心なきにあらざといへども全其病苦を助くべき良藥世に容易なきを以て、寵愛乃犬病に苦しむといへども、てを空して日を送る故に終には病増長し、病苦に狂ひて人を咬に及ぶ。此時に至ては自も他も忌嫌ひ、肯得ずして遠き野山に捨て山に放ち、或は無慈悲に擊殺しなんど致す、哀れといふも余りあり。予平生に此事を憂るにより、今般其治療乃薬を製し、世に弘くなさん事を希ふ。瘦狗乃人を咬事ひとへに犬乃所業にあらず、病乃致すところなれば、豫て愛し養ふ人は其病の發せざる様こころを用ひ、若病乃兆あらば薬を与へて治せしむべし。抑其病乃發する事大槩人の身に加わる事なし。先朝夕

露に臥て時ならざる不順の氣を感じ、風犬となる、是人の風邪又は時氣に中しといふ同じ。又は食に
餓るより發り、食乃過るより發なり。將又性質短氣にして性急なるも乃、他の犬と數回たたかい
蓋氣高ぶりて狂犬となる者なり。是人の癘氣高ぶりて乱心狂氣となるにひとし。且は身に瘡を蒙り
其瘡口により風氣を受、病となるものあり。何れにもあれ病を兆ば、旦暮の挙動かならず常異所あ
り。其形状を左に委く識せり。犬を養人閱し玉ひて病乃兆を察し、若此形状なりば急に藥を飲しめ、
病苦を救ひ得さしめ玉へ。病重りて人を多くかむるに至れば、藥を飲しむるにも咬れやせんと人近
づく事を恐る、故に藥を与人にも煩しければ、左右に病乃輕き間に早く救せ玉ふべし。然おいては
いぬをも助け、人咬る、乃難をも除き、人畜ともに安全乃基たらんかしと慎白

○病犬乃形状

○尾を垂れ下げるも乃

○眼の色赤きも乃

○舌黒く涎を流す

○鼻先かはくも乃

○頭を傾け走るも乃

○吠声出かたきも乃

○眼昏朦もの

○食を喰ざるもの

○人を避け身を隠すもの

○舌を出し喘ぐもの、但し夏乃炎天は舌を出し喘ぐ事あれども、舌乃色も黒からず、眼の色も赤から

ず、唯暑さをくるしむものなれば病にあらず。平生に冷水を飲しむべし。

右あらはす形状いづれも病犬狂犬の相なり。若是にあらはす形状をなさば、急ぎ薬を飲しむべし。

又性質短氣にして性急なるも乃ならば、平生に用いる良薬別にあり。是をなして心氣を寛にすべ

し。

○瘵きけん犬くわいせい快せい生さん散

○用もちひやうは何なににても食しょくもつにふりかけてのますべし。もしくはざればかつおぶしのこまた又は何なににてもなまぐさきものをすこし入いりてくわすべし。

○此このくすり薬は狗時いぬじ氣不正きふせう乃外邪のぐわいじやを感じ、風犬ふうけん、狂犬きやうけん、癩犬てんけんとなるものを治ちする乃妙之めうなり。既すでに病犬びやうけんの形状かたちは前さつきにつまびらかに著あらはす如ごとくなれば若もしその形状かたちあらば急いそぎ重病ぢゆうべうにならざるうちに此このくすり薬を用もちひ痛苦つうくを救すくひ玉たまふべし。但ただし病中べうちゆう乃食物しよくもつは小豆あづき乃粥かゆを焚たきてくはすべし。全快ぜんかいひとしおすみやかなり。

○獠せいけん犬じゆん潤くわ和さん散

○用もちひやうつね乃志しよくもつにふりかけてくわすべし。もしきらひてくはざればかつおぶしのこまた又は何なんにてもなまぐさきものを入いりてくわすべし。

○是これは性うまれつきたんき質短氣ややにして良ややもすれば人ひとを咬かまんとなすも乃、或あるひは眼まなこをつり上あげ心氣しんきいらちて身みをとかく廻まわし、又または聊いさの事かをも飛出とびいだし、惣さうじて而癩氣かんき乃高たかぶると見由みるも乃、必かならず後のちには狂犬けうけんとなることあり。兼かねて此このくすりをあたへて其性そのせいを緩ゆるにし、後のちの患苦くわんくを助たすけ玉たまふべし。

○閉犬速開散 へいけんそくかいさん

○用ひやう志よくもつにふりかけてくわすべし。もしくわざれば何にてもなまぐさきも乃を入れてくわすべし。但し水にてせんじのますもよし。

○犬病をうけて気をふさぎ外に出ず、常ていに食をくらはず、人にたとふならば氣ふせうなる形状にてただ何となく煩しとみ由る物に是を用ひ速に閉ふさげたるを開し鬱を散じ壯健にならしむる事妙之。

○柔狗強壯散 にうくきやうさうさん

○用ひやうつねぐ志よくもつにふりかけてくわすべし。但し一日に薬の目方壺トばかりづつ用ひべし。

○是は其性質虚弱も乃を健にし、瘦たるを肥し、臆病なるを治し、毛色あらしきも乃をして艶よく美しくならしむ乃妙薬なり。但し風犬、狂犬のたぐひには用由べからず。

右四種何れも散薬のま、食せざれば水にてせんじ食もつにかけてのましむべし。尤矮狗猫ともに用ひてよし。

瘿犬咬傷救愈散

犬にかまれたるを速やかに治す薬

夫犬は一切の邪魅妖魔を禳辟、竊盜を防ぎ、能家を守る良獸にて、人を咬る乃悪獸ならずといへども、彼病を發するに及びては、其病苦に狂ひて往來の人に咬つく事あり。俗に是を病犬と号す。されば此瘿狗の為に咬れ傷を受けるもの、急に治療を加へざれば、忽ち毒氣身中に入て、九死一生の憂ひとなり、其証凡大熱を發し、恰も傷寒の如く口噤み牙を咬、身を反すあり。又涎を流し泡を吐、汗を出し、鞏丸ちゞみ、大小便通ぜず、舌を卷、食下らず、或は狂犬の吠が如く聲を發し、終には死する者あり。初めに授療を誤まれば、毒拔ずして死に至る。則ば良医もを療を施がたし。是によつて今般良薬を製し、病犬の難にあふ人治療に怠らざる乃一助とせり。尤瘡口癒るといへども、後に食物の禁忌を厳く守ざれば、必ず再發して治しがたきが故に尚禁物乃品々を詳に著し且つ咬れし時乃心會等を委く識し、右乃薬にそへ侍らざれば、衆人にて是所持をし玉ふべし。生涯此難に會ずして此薬乃役に立ざれば、僥倖是に過ぎるべし。若不慮も此瘡受けなば其功廣大無量之。将自傷を受けずとも他咬難に會を救はば則陰德乃一ならずや。原来市中に風犬狂犬の類あり、山野にして

は獺てんく、癩狗やまいぬ、豺お、かみとう、狼等お、かみとうあり。他出旅行たしゆつりよこうの客かくはきわめて携たずさへ玉たまふべし。偏ひとへに自他じたの重宝ふうほうなりと勸す、め申まうすことしか尔り。

大阪、心齋橋、通博、勞町北へ二軒目 清水谷滄海堂精製

本家ばくろう町



ゆびぐすり

一切のいたみをとめる事
めうなり

右御薬の儀はゆびのことに限らず、一切の腫物、きりきず、やけど等々も即座にいたみをとめること
との妙なり。

- 一 ひょうそ 一 つまじらみ 一 ようてう 一 やけど 一 きりきず 一 つききず
- 一 うちきず 一 そとまめ 一 はるをづれ 一 わらじくひ 一 はりとがめ 一 衾ぶと
- 一 ぢ 一 さ不 一 灸のいぼ不 一 ち乃でき物 一 かんさう 一 よこね 一 ひぜん乃より
- 一 がんださ 一 いんもん乃きず 一 できも乃一切 一 そげ乃立ゝる 一 ひゞ 一 志もやけ
- 一 あかぎれ 一 かたくさ 一 ねあしのいたみ 一 おもはずはれいたむによし
- 一 ひゑ志つ 一 さ不のできも乃 一 どくむしのさしたるによし

近年法方にまぎらはしき類薬出まわる、何とぞ名所をぎんみの上おもとめ下さい。

私店は昔よりさるのはんがんをお目志るしに仕まつり候間、是をお目あてにお求め下さい。

大坂心齋ばし通博労町北入二けん目 清水谷滄海堂製

啓明